

# 要介護高齢者の生活問題と家族支援アプローチの構築

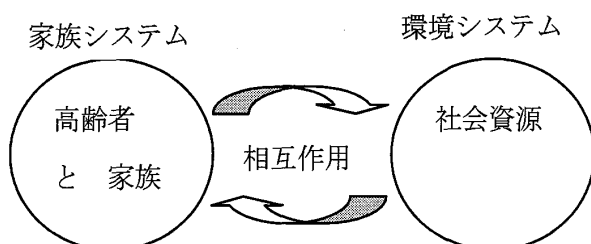
菊池 信子

## はじめに

要介護高齢者の抱える問題は、保健・医療・福祉に渡って広がりをもった生活問題であるといえることができる。すなわち、老いに伴う心身状況の変化によって、高齢者は、治療や予防といった策を必要とする、生活上の困難といった状況に陥るからである。また、介護問題に関して、要介護の高齢者が生活する家庭では、家族もまた、何らかの介護問題の当事者として要介護者に関わりながら、ソーシャルワーカーの支援をも受けながら、社会的なサービスを活用し、状況の改善にむけて取り組んでいるといえよう。

そこで、本論では、そのような要介護者とその家族の生活問題の広がりを把握しようとするソーシャルワーク実践の視点の必要と、その具体的な方法として家族支援アプローチというものを構築し、その有効性について検討していきたい。

在宅の場合、要介護の高齢者は、同居あるいは2世帯住宅、別居であっても、家族と密接に関わり合って生活しているのが実状である。そこで、これら高齢者と家族を、家族システムとしてとらえ、家族システムとこれらの家族を取り巻く環境システムの相互作用として生活をとらえていくことにしたい。<sup>(注1)</sup>



家族システムの構成メンバーは、本論では、当然ながら要介護高齢者とその家族とする。要介護の高齢者は、個人で問題を抱え、個人で社会資源を導入して解決を図るものであるが、在宅の要介護高齢者の場合に、要介護という状況から引き起こされた生活問題は、家族間で共通に抱える問題として共有化されることが多いのが、特徴である。

環境システムには、社会福祉の法制度、サービス資源、ソーシャルワーカー等の専門家による介入、近隣の支え合い、ネットワークの状況などが含まれる。

これらの2つのシステムの相互作用の状況によって、生活が円滑に営まれていたり、問題を抱えていたり、という状況が見出されるのである。

## 1 家族に対する生活支援の意義

家族は、社会を構成する最小単位の集団であり、かつ個人の生活を創出する基盤となるものである。このような家族は、とくに在宅で要介護高齢者を抱えた場合に、この問題の解決に向けてさまざまな機能を果たそうとする。しかし、家族システムの構造が不安定、あるいは関係性が円満でない場合に、家族システムとして機能する過程において、力量が落ちる可能性がある。このことは、単に家族介護力の低下ということの意味しているのではない。家族による介護も含まれるであろうが、環境システムに位置する諸社会資源を有効に取り込めなくなると、家族員間には、共通に抱えた介護問題に対する支援能力が低下

してしまうと考えられるのである。

家族システムとして、環境システムとの有効な相互作用を創出していくために、家族による、より効果的な関わり、言い換えれば、参加と協働をうながしていくことを、家族支援アプローチとして提示することができるのではないだろうか。ここでいう家族支援アプローチを構築するためには、家族システムの生活全体を見通し、把握できることが不可欠となる。

さらに、家族システムにおける生活の時間的な変容をとらえていくエコロジカルな視点を含めた、エコシステムの視座から家族をとらえていく必要がある。

そのためには、家族システムの生活に関わる世界（以下、生活コスモス）全体を把握できるコンピュータ支援ツールの活用が有効である。このコンピュータ支援ツールは、既に、教育支援ツールとして開発されている(2005)<sup>(注2)</sup>が、それを、さらに家族システムの生活コスモスを把握できるよう加工して活用するものである。そして、それを重要な時期ごとに、繰り返し活用することによって、エコロジカルな視点から、状況の変容をみようというのである。

## 2 家族支援ツールの開発

上述の家族支援ツールとは、家族システムが環境システムとの相互作用によって創出される生活コスモスをコンピュータ処理によってとらえようとする発想に基づいている。

この発想は、ジェネラル・ソーシャルワークの概念に基づいている。<sup>(注3)</sup> ジェネラル・ソーシャルワークとは、包括・統合的な実践概念であり、ケースワーク、グループワークというようなレパートリーをもち、状況に応じてそれらのレパートリーを適切に適用し、それらの側面からのアプローチを展開するものである。また、ジェネラル・ソーシャル

ワークにおける、社会福祉の政策と方法の統合ということについては、フィードバック、フィードフォワードといった循環機能によって状況の改善を目ざしていくものとする。これらの理論と実践の一体化を実現するものとして、コンピュータ支援ツールを活用して、実践の具体化を図ろうというものである。

このジェネラル・ソーシャルワークは、エコシステム構想に依拠している。<sup>(注4)</sup>

エコシステム構想とは、上述のシステム思考と、過程における時間的な変容等をとらえようとする生態学的視座によるものである。このエコシステム構想は中範囲概念であり、この発想にもとづいて情報を収集し、コンピュータによってシミュレーションし情報処理することで生活のエコシステム状況を理解できると考えるものである。この流れを家族支援に加工したものが、図1である。

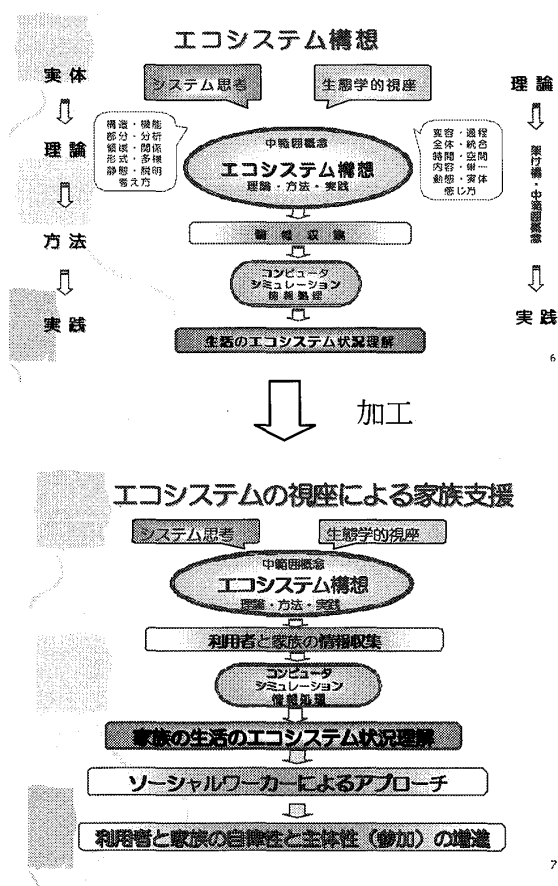


図1 太田義弘作成を下図に加工

これを、具体的にコンピュータ支援ツールとして開発することになる。

先行開発された教育支援ツールは、生活コスモスについて、人と環境という枠組みを精緻化して提起している。ここでは、それを、家族と環境という枠組みに加工していく。(図2)

そして、加工・開発の焦点となる家族の生活コスモスについて、個人と家族の生活の広がり、家族構成、家族関係、家族機能について網羅できる内容を想定した。家族機能は、家族生活の現状、家族生活の問題の2つの側面からとらえていくことにする。(図3)

### コンピュータによる家族支援ツールの開発

先行開発された教育支援ツール (太田ら、2005)

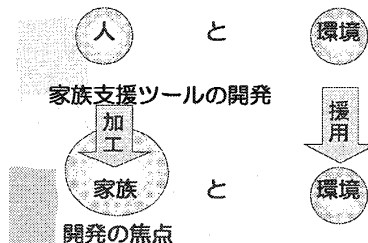


図 2

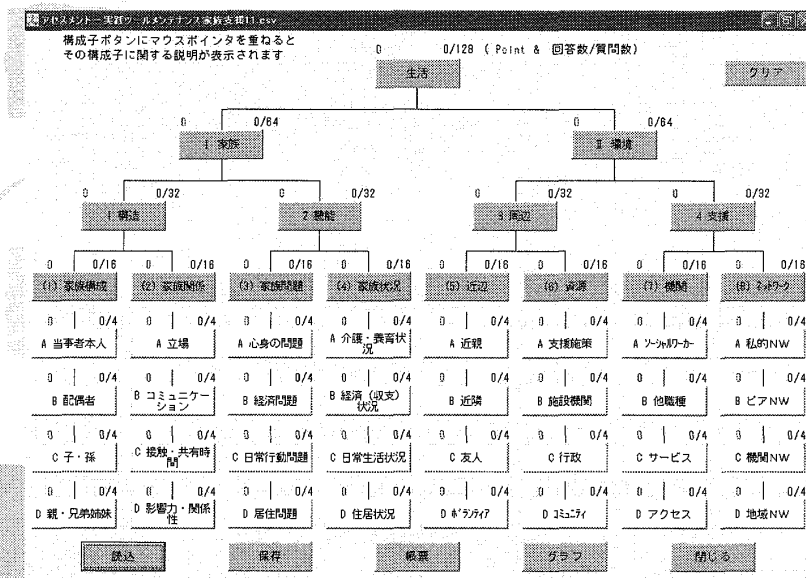


図 3

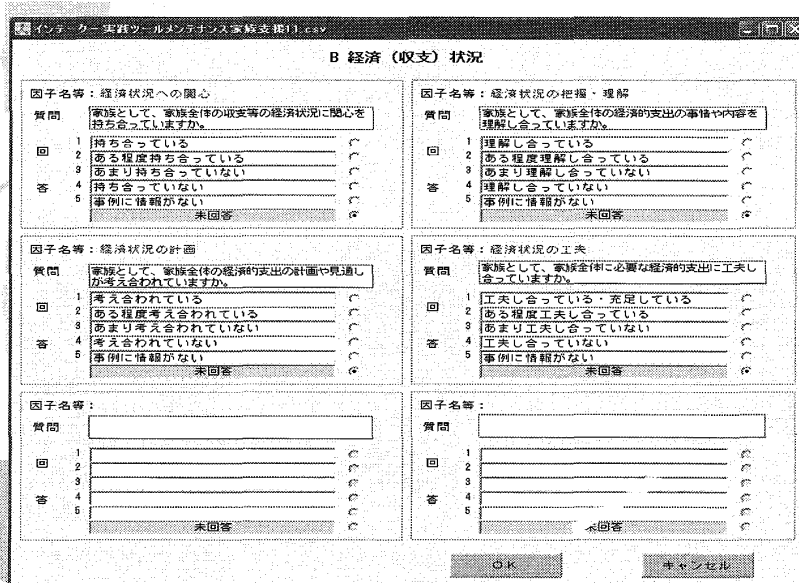


図 4

要介護高齢者の生活問題と家族支援アプローチの構築

家族支援という視点からみた、各事例の特徴				
ソーシャルワークの視点	エコシステムの視座にもとづいてソーシャルワークがとらえる家族		ソーシャルワークの注目点	ソーシャルワークの具体的な介入
事例タイプ別	家族システムの特徴	エコロジカルな視点	生活の特性	ソーシャルワーカーの具体的な介入
事例1 夫婦げんかが多い、夫婦2人家族で、夫がサービス利用者の場合	個人化した家族、個人と家族外システムの繋がりがある	夫婦として生活してきた時期を越してもそれぞれが好きなことを別々にして過ごしてきた	個人化した家族のバランス	もっとも身近かな人としての連絡・連携の機能化
事例2 暴力を振るう夫と妻、娘の3人家族で、夫がサービス利用者の場合	夫と妻は対等な関係、夫婦が互いにプライドを傷つける・暴力を振るう、個人化した家族、家族外システムがない	以前から夫婦仲はそれほどよくない	家族外システムとの接触	家族外システムと接触できる環境整備
事例3 結婚後長年に離れて暮らしていた娘と再同居した母と娘の2人家族で、母がサービス利用者の場合	再構成された家族システム、サブシステム間の個人化した関係性の形成、家族外システムの縮小化	生涯家族-サブシステムの転出・転入-定位家族 というサブシステムの出入り	エコロジカルな経過のなかで個人化していった家族のバランスとキーパーソンの変化	キーパーソンへの協働、家族外システムの形成

事例4 病気の妻と夫婦2人家族で、夫がサービス利用者の場合	同居家族、別居家族を含め関係性のよい家族システム、家族外システムとの繋がりが少しある	夫婦中、独立し別居となった子とも良好な家族関係を継続してきた	家族外システムとの間わりによる生活力の強化	家族外システムの具体的な状況の把握、家族システムが家族外システムを意識化し機能化を促進
事例5 長男夫婦と2世帯住宅に住み、長男の妻と関わりをもっている母がサービス利用者の場合	2世帯住宅で、当事者は1つの家族システムを期待し、長男家族は2つの家族システムを想定したうえでシステムの相互作用を意識している	当事者は両親と早く死別し、愛情が薄かった	エコロジカルな経過から、見捨てられ感が強いと考えられる。当事者からみて1つの家族システムを期待していることに注目	長男家族に丁寧に寄り添い、話を聞くことで、長男家族に家族システムとらえ方の変化を促進
事例6 ひとり暮らしで、近くに娘がおり、娘と関わりをもっている母がサービス利用者の場合	別居子との2つの家族システムがあり、娘家族システムの1サブシステムのみが当事者家族システムとして機能している	40代で夫を亡くして以来、気丈に娘を1人で育て上げた生活への姿勢は変わらない。	外部システムであるホームヘルパーに、当事者を理解した娘が、うまく働きかけた変化に注目	当事者の話を傾聴することで、当事者が気づき、娘が気づき、それがホームヘルパーに伝えられたので、傾聴を継続

事例7 夫婦2人暮らしで、娘家族と2世帯住宅に住む夫がサービス利用者の場合	2世帯住宅で、当事者の家族システムと長女家族の家族システムが独立して在り、システム間の境界線と当事者システムからの介入を受け入れにくい長女家族システムが問題を抱えている	妻は当事者の認知症が受け入れられず、長女は養母の父への対応の悪さと養母から押しつけられる父の介護に苛立ちを感じている	2世帯の2つの家族システムのみで完結させるのではなく、外部システムとの作用による解決に注目	家族システム間の境界を確認し、外部システムとして、施設入所を進める
事例8 夫婦2人暮らしで、協力的な夫がいる妻がサービス利用者の場合	夫婦の家族システムと別居の家族システムのサブシステムである長女が、同一システムとして機能している	震災後に一戸建て住宅が減少し、近隣の外部システムが減少してきたことから、別居の長女への期待が高まっている	家族システム内で夫がよく機能しているが、疲労気味であり、外部システムへの検討に注目	家族システム内の夫への丁寧な対応を続け、外部システムとしてのサービスの投入でバランスをとる
事例9 夫婦2人暮らしで、2人ともサービス利用者の場合	家族システムの成員2人とも問題の当事者であり、システム間で支えている	当事者は、交流や活動の機会が多かったため、それぞれ情報収集して、活用しようとしている	家族システムだけで完結できないことを家族外システムのサービスを活用することに注目	家族システム内の夫への納得いく対応と、家族外システムでの活用できるものをうまく調整する

2006.7.30 菊池作成

図 5

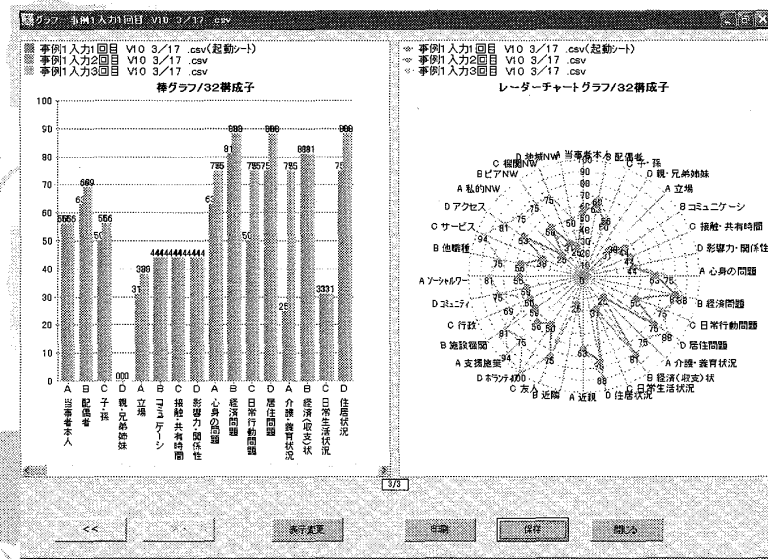
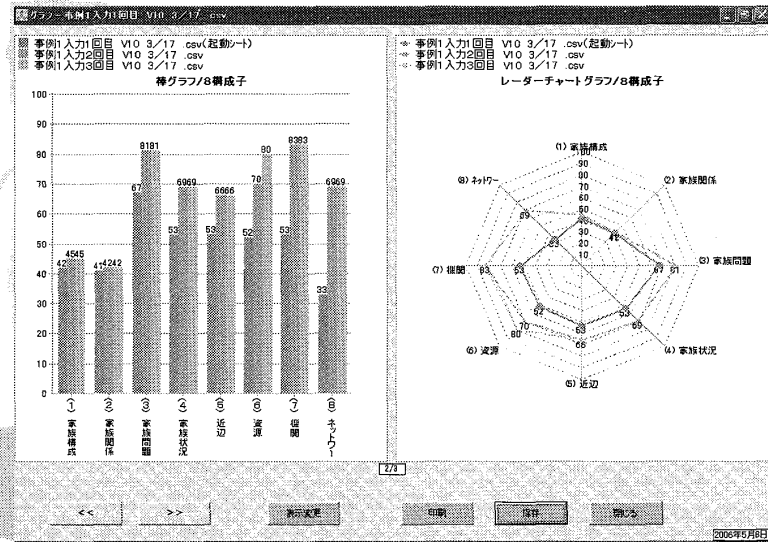
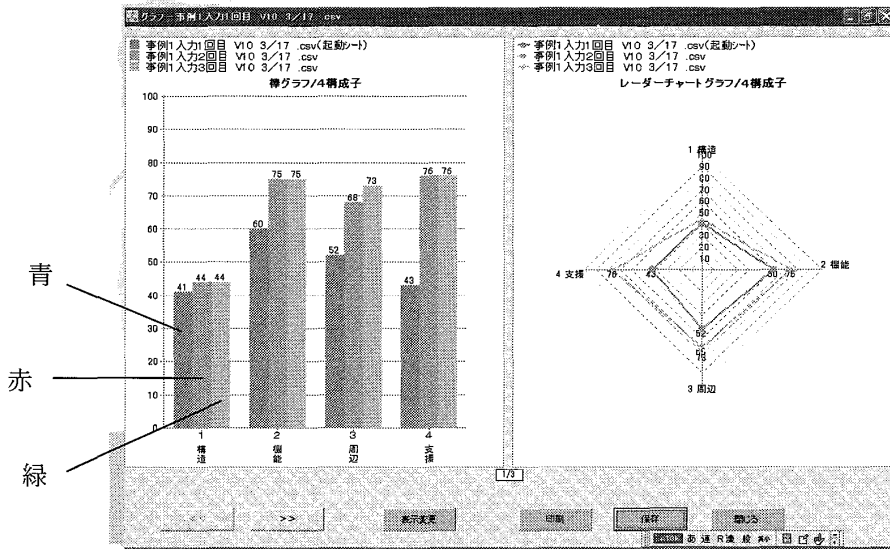


図 6

環境については、教育支援ツールの環境システムの枠組みが精緻化されたものとして普遍化できると考え、そのまま援用した。

この枠組みにもとづいて、1つの項目につき、4つの側面からの質問を構成している。4つの側面とは、関心、理解、姿勢や今後の見込み、工夫の状況といった内容から構成されている。(図4)

このような家族と環境についての32項目128因子の質問に答えることによって、家族の生活コスモスの把握が可能になるというものである。

これを、具体的な要介護者とその家族の事例に活用していきたい。

### 3 家族支援ツールの活用

ここでは、具体的な事例に対して、家族支援ツールを適用し、その活用状況についてみていくことにする。

たとえば、図5の事例1について、この家族支援ツールを活用して、質問に答え入力していくと、図6のような生活コスモスの状況を情報として得ることができる。

図6の3つのグラフは同様の事柄について、表示を詳細化していった場合におけるビジュアル化の状況である。レーダーチャートの輪が広いほうが状況は円満で安定している。へこみについては、コンピュータ入力時の質問項目において、状況に問題がある場合、ポイントが低くなるよう設定されているものである。青は初回入力時(事例内容のアセスメント時点)、赤はつぎの局面時点、緑はそのつぎの局面時点での入力状況を示している。たとえば、事例1は、夫婦2人ぐらしであるが、夫婦仲がよくなく、家族構成、家族関係、家族問題、家族状況は、初回入力時には低くなっている。また、初回入力時点は、アセスメント時点であるため、サービスの提供が開始されていないので、資源、機関、ネットワーク

の状況もレーダーチャートの輪が狭く、ポイントは低くなっている。

これが、アセスメント後にサービスを投入すると、家族問題、家族状況はポイントが上がっていることがわかる。また、資源、機関、ネットワークにも広がりが見られ、ポイントが上がっていることがわかる。図6の3つめのグラフは、32項目についてのポイントの変容状況を読むことができるようになっていく。

介護支援専門員の協力を得て、彼らが担当している、実際に進行中の事例9件について、図6のように、3つの時点での入力をしてもらった。介護支援専門員みずからが入力し、入力後に事例の実状と実際のソーシャルワーカーとしての介入の状況を照らして分析を加えた結果、つぎのような傾向を見出すことができた。

すなわち、介護支援専門員の機能と家族と環境のシステムは、図7のように示すことができる。

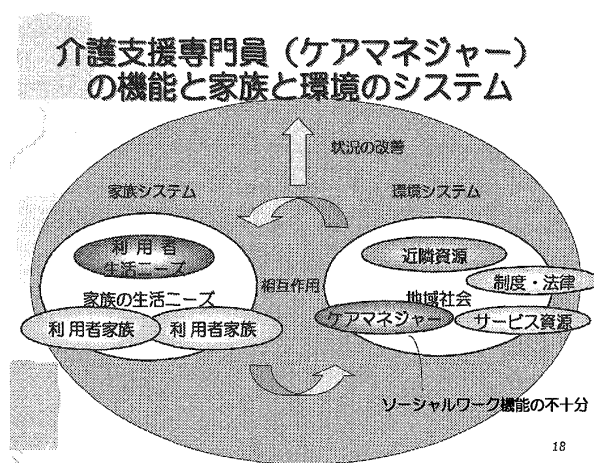


図7

家族は、要介護者を含めて、介護問題の当事者として、家族システムのなかに位置づけられている。そして、環境システムに位置する介護支援専門員(図7)ではケアマネジャーと表記)の介入によって、相談とサービスの

提供を受けることができるようになった。その結果、ある程度の生活状況の改善をみることができ、ケアマネジメントの効果、ケアマネジャーのソーシャルワーカーとしての介入の効果をとらえることができるといえよう。

ケアマネジャーは、介護保険制度のサービスに焦点をあててケアパッケージを作成し、サービス投入計画を立てる傾向があるため、生活コスモス全体を見渡したサービスの提供になりにくい状況が見出された。ケアマネジャーは、把握している情報がサービスとして対応できるものに傾斜している、それ以外の情報を本人や家族に確認しようとしめない傾向がある、ということが明らかにされた。

このような傾向の発見は、家族理解に不可欠なエコシステム情報が系統的に整理・収集できたことによって、見出されたものといえる。この意味で、家族支援ツールの有効性を見出すことができよう。

#### 4 研究結果と今後の課題

本研究の結果として、つぎのことがいえよう。

- ① 家族支援ツールの活用によって、家族理解に不可欠なエコシステム情報が系統的に整理・収集できること
- ② 介護課題への家族参加と協働を容易にする有効な方法を模索できること
- ③ 家族支援ツールの活用から、支援展開に有効なシミュレーション情報の提供が可能なこと
- ④ ひとりぐらしと別居家族への支援展開にも有効なこと

家族支援ツールの活用によって、ソーシャルワーカーは、家族支援にむけて、不可欠な家族の生活コスモスを把握することができる。それを、事例の経過に合わせていくつかの時点で入力することで、エコシステム情報

が系統的に収集できるのである。

また、介護という問題を抱えた家族に対して、ソーシャルワーク実践に家族にも参加し、協働してもらうために、その前提として必要な家族状況が把握できるので、家族に介入しやす、ということがあげられる。

さらに、上述のことと関連するが、家族支援ツールの活用から、ソーシャルワークの支援展開に有効なシミュレーション情報の提供が可能になり、家族への説明や家族の状況理解に役立つと考えられる。

また、ここでいう家族とは、同居している家族のみをさすのではなく、2世帯家族や別居家族であっても、介護問題を共有していればその問題をとおして、家族のエコシステム状況を把握することが可能である。したがって、そのような幅広い家族形態にも有効に支援が展開できると考えられるのである。

今後の課題としては、この家族支援ツールの応用範囲として、家族とあまり関わりがない人や、家族からの情報が得にくい高齢者の場合に、活用できるか、という点があげられる。また、ソーシャルワーカーが活用しやすい家族支援ツールへの加工という点があげられる。すなわち、本ツールは、128の因子に対して質問に答える形でコンピュータに入力していくので、全因子への入力に小1時間を要する。現実のソーシャルワーカーの業務に取り入れると考えれば、20～30分程度の時間に短縮できないと実用性は高まらないというのが、シミュレーションに参加したソーシャルワーカーの意見であった。より簡易な質問項目立ての検討が必要になると考えられる。

#### 註釈

- 注1 畠中宗一 編 「よくわかる家族福祉」148～149頁 ミネルヴァ書房、2002年 によれば、家族をシステムとしてとらえる家族システム理論は、ベルタランフィーの一般システム理論

やサイバネテクス・システム理論を取り入れて発展してきた理論であり、単に人間の集合体としてみるのではなく、独特の構造をもった有機体としてとらえ、その構造は人間関係を表すパターンによって成り立つと、考えられている。

注2 太田義弘・中村佐織、石倉宏和編著「ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング」中央法規 2005年

注3 中村佐織『ジェネラル・ソーシャルワーク』黒木保博・山辺朗子・倉石哲也 編著「ソーシャルワーク」中央法規 2002年 2頁

注4 太田義弘「ソーシャル・ワーク実践とエコシステム」誠信書房 1992年103～106頁

なお、事例については、兵庫県内の居宅介護支援事業所2か所の協力を得て、介護支援専門員から事例の提示をしていただき、事例掲載についても了解を得ている。